

行くつもりであると語ってきた。

航空自衛隊においても常に新しい分野の仕事をさせて頂けたし、空手は自分自身の修養の根幹となつて、自衛官の時は、全自衛隊空手道連盟の理事長および副会長として、また、退官後も全自衛隊空手道連盟OB会の顧問として、自衛隊内における空手の普及および発展に寄与できた。在米期間中も、米国人に対して日本武道としての空手道の普及に貢献できた。

顧みて久里浜の青春時代は、我が人生を完全燃焼できる素地を培った時代であつたと回顧している。

ねむの木の島 硫黄島

人の心に「平和の砦を」……
そして英霊よ安らかに！

河野 学 陸81

1 20年振りの硫黄島

本土から南に約1200^キ、私が初めて硫黄島にC-1で降り立ったのは、約20年前の11月だった。その時、私は富士学校戦史教養班長として全職種のFOC学生126名の硫黄島現地教育を担当した。その日

① 標高172メートルの摺鉢山の根元分の岩が浮き上がり緑の部分が少なくなつた。

② 米海兵隊3個師団が上陸した東海岸の幅は300メートル以上にも拡がつた。

③ 西海岸の沈船は、完全に船底が砂浜に打ち上げられている。そして益々緑豊かになつたと感じたのは、成長したねむ(合歓)の木の密生が更に進んだからなのか？だが島に降り立つた時の厳肅な思いは、20年前と変わらない。遺骨収集が継続されているが、今も約1万柱余のご遺骨は故郷へ帰ることなく地下に眠っている。

2 天山慰霊・英霊達の望郷の思い
来島者にとつて変わらないのが、天山慰霊碑の英霊に来島報告をし、最後に天山で慰霊し終わること。天山は硫黄島の北の端、1カ月に及ぶ戦闘の最後の激戦の地でもあった。遙か南に硫黄島の象徴摺鉢山を臨み、米軍が上陸後5日目には、あのローゼンダールの写真で有名な「摺鉢山の星条旗」が翻つた。その時の兵士達の思いは如何ばかりであつたろう。そして北を見下ろせば、当時



調査団の天山慰霊

米艦艇群に跳梁された本土に続く太平洋が、何事もなかったかのように今は青く静かに横たわっている。

天山は本土に一番近い所でもある。慰霊碑は、昭和46年に厚生省により建立された。何故ここに？それは、50度以上にもなる壕の熱気の中で兵士が呟いた「泳いででも帰りたいな！」の望郷の思い、家族に会いたい思いを少しでも叶えてやりたいというこゝろだつたに違いない。

慰霊碑は中央の花崗岩は骨箱を象徴し、その下のステンレス容器には軍刀・銃等遺品が納められている。また天井の空間は、壕に立て籠つた兵士の天水と太陽を求めた願望を表している。支援の自衛官を含む調査団は、黙祷、献水、焼香そして精一杯の慰霊の気持ちを含めて手を合

せた。

平成6年、天皇陛下(現上皇陛下)が初めて硫黄島に行幸された時の御製が碑に刻まれている。

精魂を込め 戦ひし人未だ
地下に眠りて 島はかなしき

3 強者どもが精魂を込めて戦いし跡

硫黄島の日本軍将兵がいかに精魂を込めて戦つたかは、米国の状況を見れば明らかである。

・ワシントン郊外の国立アーリントン墓地の正門前には「摺鉢山の星条旗」の巨大なモニュメントが建ち、国の誇る歴史的勇者として称えている。私も自衛官時代に出張でワシントンに行った際、日本民族の叙事詩として誇らしい気持ちになつたことを覚えていてる

・第2次世界大戦で大統領から直接手渡される名誉勲章は、27/464個(約6%)が硫黄島従軍兵士に授与されている

・米軍の死傷者は2万6000人で、日本軍の2万3000人よりも多い

調査」である。これは、何回か遺骨

収集及び調査活動が実施されているが、海外資料調査情報や遺族等の要望により、これまでの活動を踏まえ再調査が必要と思われる地域を調査するものである。未発見壕及び過去に収集された壕で、調査の着眼は、

・収集活動の再実施の必要性の有無(壕内に未発見のご遺骨?)

・遺骨収集活動に必要な事項(壕の大きさ、必要な労働力等)

・崩落などによる閉塞箇所(崩落の先に壕が伸びているか?)

・崩落の危険性がある箇所(掘削が必要な場合その掘削方法)

・壕の底部を出しているか(埋没部分にご遺骨?)

各壕とも有毒ガスが発生し壕内温度が50度以上になるのは珍しいことではなく、陸自化学隊員の第4特殊防護隊福山2曹と石橋3曹が「自衛

隊さんお願いします」と依頼され魁となる。その場合10分以上行動しないこと、屈曲部が多い場合はスズラ

ンテープを腰に巻き安否を確認するなど、安全に十分な配慮がなされている。

今回の調査箇所は、島の西側。西翼の堅陣大阪(現国土地理院地図:坂)

山北東地域の180^坪×180^坪のグリッド12カ所。米軍は、この島に4万^トの砲弾を撃ち込んだ。

海兵3コ師団は東側海岸から上陸し、結果的に西側は主攻撃正面ではなかった。しかしながら、西側から侵攻する敵に対し大阪山を核心として、台上から海岸までに10^日前後の崖が数段、また地皺が複雑に入り組んでおり、その崖の根元に強固な複郭陣地を構築した。その壕群は、海上から直接砲撃を受けないよう壕口が掘られ強靱性に富み、また各壕とも良く連接されている。そのような中、どこからも確認でき屏風のように立ちはだかる大阪山は、将兵に取って陣地死守の力強い心の支えとなったはずである。元普通科隊員の私がそう思った。

調査は、グリッドの四つの基点を出発・終了点として、過去調査・収集した壕だけでなく、面的に全域を踏査し漏れがないようにする。

ねむの木、ガジュマル等熱帯植物が密生する森は、正にジャングルである。それを支援業者4名が啓開し、その後には調査団7名(団長、私、厚労省監督官、硫黄島協会75歳の陸さん、遺族会の80歳の柴田さん、自衛

官2名)が続く。1柱でも多くのご遺骨をの思いは皆同じである。調査間、やはり胸を打つのは地熱の高さと壕の狭さ。80年近くたっても壕に残る鉄帽、小銃弾、水筒、飯盒、石井式濾過機、医薬品の瓶等。一升瓶は水を溜めるためだったのか、それとも偶には酒が供されたのか? 兵士はどのような思いで過ごし、敵を待ち受けたのか? 思い浮かべるのは故郷や家族だったに違いない。

最大の激戦地の屏風山付近、今は厚労省現地事務所下の武蔵野工兵隊壕、ここは今も終日白い水蒸気が壕口から吹き出ている。

敵上陸前夜、中年の応召兵が紙幣を1枚ずつ延ばし一生懸命数えていた。現役に加藤上等兵は、「三途の川の渡し賃には多すぎるじゃないか」と冗談を口走ろうとしたが、その真剣な表情に言葉を飲み込んだ。この兵士は文盲であり、いつも葉書の代筆を頼んでいた。文句はいつも決まっていた。

幼い娘に「元氣ですか。お父さんも元氣でお国の為に一生懸命働いています」であった。ただそれだけである。兵士は、死は必至と知りながらも一入募る家族恋しさの慕情に駆

られ、自分流の表現で上官に告げたのであろう「そりゃいい、その時は俺も呼んでくれや」「ハイきつと呼びます」。他の将兵も、胸中には故郷と家族への思いが浮かんだに違いない。

4 まだ1万柱が残っているのは何故?

硫黄島で戦死したのは、陸軍1万4000名、海軍7900名の合計2万1900名。戦後70年経っても、未だ1万1000余が故郷への帰還が果たされていないのは何故か? これは誰もが抱く疑問である。調査の最中も経験豊富な柴田さんと陸さんも「ねむの木を全部取っ払わないと」「滑走路の下にいつばい残っている」「玉名山があったのには今はない」など話された。これを少し整理してみた。

戦争が終わり、第1回目の遺骨収集が行われたのは、戦後7年たつてから。1951年にサンフランシスコ講和条約が締結され、講和後の日本をどう処理するかの世論が活発になったのが発端となった。1952年1月初めて硫黄島の調査が実施された。これが起源である。

翌1952年に初めての遺骨収集が実施されたが、この時は政府の「象徴遺骨」方針で1日の遺骨収集で終了した。その後15年放置されたが1968年の小笠原諸島返還が契機となった。緊急を要する国民的課題として、玉砕の島硫黄島が調査・収集の重点となった。更に1972年グアム島で横井庄一さんが発見されて関心が集まり促進された。しかし、戦没者の約半数しか故郷へ帰還していない。

要因は、

①戦後23年間の空白

焦土化した島の緑化推進のため、米軍が空中からねむの木の種子を空中から大量散布した。ジャングル化により当時の旧道が全く跡形がなくなり、殆ど徒歩で歩くのが困難になった。今は整備されているが、20年前の学生教育の事前偵察時、その労力の半分以上は鉋と鎌を持ち教育場所に至る道路の啓開作業だった。

②米軍の飛行場等建設の工事で地形が一変

・著名な山だった玉名山が消失した。ねむの木と合わせ地形が一変し、生還者の証言による探査行動や洞窟の発見を困難にした。

・米軍の掃討作戦及び戦後の工事に
より壕の入り口が閉塞されるとも
に、飛行場建設で壕が押しつぶされ
た。

③ 広大な滑走路下の探査・搜索に
限界

・基地は空自と海自により運営さ
れ、立入りできるのは許可を得て1
回/週である。

地下壕発見のため高性能地中探査
レーダで探査し、壕跡らしきものが
あっても掘開しない限り実態は掴め
ない。

・米軍の空母艦載機のNLPの訓練
基地として供与されており米軍の壁
がある。1968年の小笠原諸島返
還前の朝鮮戦争及びベトナム戦争時
は核が持ち込まれたとも言われてい
る。今後中国の太平洋進出が活発化
すれば、硫黄島の戦略的基地として
の重要性が更に増す。

④ 遺骨の風化

戦後80年近く経ちご遺骨の風化が
進んでいるとも言われているが、ど
れぐらい土に還っているという数値
は分からない。ただ専門家による
「硫黄島は遺骨の風化する条件が
揃っている。土壌は酸性であり、骨
が触れて風化するの酸性の土壌」

ということである。格段に遺骨収集
が進んでいる沖縄は、アルカリ性の
土壌も幅広く分布している（一概に
比較できないが）。

⑤ 情報

1969年度に2837柱のご
遺骨が発見されたことがある。それ
は1951年〜55年にスクラップ回
取のため現地で活動したT建設の作
業員が発見したご遺骨をパロン西
（ロスアンゼルスオリピック馬術
競技で金メダル獲得）が率いた戦車
部隊陣地の近傍にそと安置したか
らである。その場所が1953年の
報告書に記入され、なおかつ収集団
は「戦没日本人の碑」を目印となる
よう設置した。それがT建設からの
聞き取りに基づき、1968年の調
査で標石が発見され翌年の成果に繋
がった。その後、目立った成果はな
かった。

2017年度以降の遺骨収集数は
ほぼ2桁台であるが、2010〜13
年の間に約1600柱のご遺骨を収
容した。それは米軍から摺鉢山及び
滑走路西側の集団埋葬地の情報が提
供されたからである。硫黄島生還者
で現存する者がいない中、戦時中の
日米文書、その他にも貴重な情報が

埋もれているかも知れない。

5 再会記念碑：ジャコビー少年の 手紙

日曜日、作業は休み。懐かしさも
あり「慰霊道標案内図」を頼りにで
きるだけ多くの戦跡を訪ねた。20年
前とは比較にならないほど83カ所の
各部隊の位置を示す碑に至る経路が
整備されている。芝生に囲まれ密生
するねむの木もそこだけは伐採され
ている。そこには遺族からの折鶴、
ペットボトル、花が飾られ参拝する
方々の慰霊の気持ちが表示されている。
私も各所で献水し手を合わせた。そ
の中、島内各所の草叢の影や洞窟の
片隅にひっそり佇む遺族が個人で建
てた小さな墓標の数々が胸を打つ。



ジャコビー少年と祖父

(出典：空白編集集硫黄島紹介冊子)

墓標には「父この地において永眠」
等の文字が刻んである。20年前の学
生教育は、実質2日間という限られ
た時間で戦場の様相、先人の苦労、
遺訓を偲ぶことのできる摺鉢山、大
阪山、千田豪、栗林豪等に限定せざ
るを得なかった。後で知り、行けば
良かったと思う記念碑があった。米
海兵隊3コ師団が上陸した南海岸の
再会記念碑である。1985年2月
19日、それは40年前に米海兵隊3コ
師団が上陸した日である。この日、
勇気と犠牲心をもってこの地で戦っ
た日米将兵は、日本側は陸地の方か
ら、米側は海の方から歩きこの記念
碑の前で再会した。最初は、重苦し
い雰囲気漂っていた。その情景が
マイケル・ジャコビー少年のレーガ
ン大統領に宛てた「平和の手紙」に
ある。これは、国際ロータリークラ
ブが世界の若者を対象に行った「平
和の手紙」に応募し4万5千点の中
から最後に選ばれた手紙である。彼
は16歳、硫黄島の戦闘に従軍した祖
父に連れられこの日の式典に参加し
た。

「レーガン大統領閣下、私の生涯
に深く刻印を残した個人的体験を大
統領にも知って頂きたくペンを執り

ました。私の祖父は硫黄島の悲惨さと恐怖を良く語り、私も海兵隊員だった祖父の写真を見、書物も読みました。それが、この日現実にになりました。(中略)日米は『平和の式典』が行われる場所へ行くまで誰も口を聞きませんでした。大きな記念碑の両側に日米の関係者が分かれて座りました。僧侶が焼香を済ませると牧師が説教し、軍楽隊が両国歌を吹奏しました。米軍将校が大統領の言葉を代読致しました。しかし、あの日あの場で次に何が起こったかを大統領に見て頂きたかったと思います。

日本軍兵士の未亡人と娘と米軍兵士の妻や子供達が互いに近寄ったかと思うと抱きしめ合い、身に着けていたスカーフや宝石などに思いの丈を託して交換し始めたのです。男達も近づいて最初は躊躇いがちに握手しましたが、やがて抱き合い声を放って泣き出しました。中には嘗ての敵に、この戦場で拾った思い出の品を返す者もありました。

ふと気がつくくと、誰かが私の頭に帽子を載せてくれました。嘗ての日本軍人です。笑顔で自己紹介し、その作業帽を私にくれると言いました。私の祖父も近寄って話し始めました。

二人は、私がこの場でこの体験を分かち合っていることを喜んでる風でした。私は、その場で余りに感動して二人が何を話しているか分かりませんでした。色々な思いが頭の中を駆け巡りました。40年前、今は老人の二人が摺鉢山の山頂で互いに殺し合おうとしていた。共に天を載かずと誓った敵兵同士が今互いに抱き合っている。その時、この場所は砲弾や銃弾が飛び交い、死と憎しみに満ちていた。それが僅か40年の間にどうしてこのように変わったのか。

私は余人に知り得ぬ何かが分かったような気がしました。昨日の敵が今日の友となり得ることを、祖父と手を握り締めている旧日本軍兵士によつて、全世界の人に示してもらいたいと思いました。二人は、平和の大使として世界に語りかけることができると感じたのです。お互いに腕を組んで戦争の悲惨と恐怖を語り、嘗てはお互いに殺し合おうとした間柄だったということ。私は祖国を愛し、一旦緩急あれば銃を執つて戦うつもりです。しかし、その孫が将来その人を抱きしめると知っていたら、その人を殺すことを躊躇するでしょう。

その日、私は集まった人々の顔を覚えようと沢山の写真を撮りました。米国の新聞は『日本製のビデオ・カメラで感動する祖父の姿を撮りまくるアメリカ少年』と記事にしました。記者はそんな凶に皮肉を認めようとしたりに相違ありません。だが、記者は肝心な点を見落としていました。私が記録したのは、その場で憶えた感動だったからです。島で私は最年少でしたから、他の誰よりもこのことを永く記憶に留めることができる。だから、その日の感動を決して忘れないと心に決めたのです。その日硫黄島で感じた思いをできるだけ多くの人と分かち合うのが私の義務と感じています。ですから大統領閣下、誰よりもまずあなたからと思いいペンを執つたのです」

6 ねむの木の島：一人の心に平和の砦を

上がった。ご遺骨は、厚労省現地事務所の安置室に仮安置された後、専門家によるDNA鑑定等が行われる。身元が判明すれば、78年振りに故郷のご家族の元へ帰ることとなる。在島間、都職員と思われる若者達の慰霊巡拝の姿があった。恐らく2泊3日くらいの短い滞在である。これだと天山、摺鉢山、東京都鎮魂の丘等限られたものとなる。現地では遭ったのは、砲身に敵の弾丸が突き刺さっている大阪山海軍砲台を熱心に撮影する姿だった。

彼らは何を感じ、何を心に刻むのであるのか？ 来島前にはいくらか勉強をし、約80年前に日米の激戦の場であることを知り、厳粛な気持ちで慰霊するであろう。そして英霊に感謝するに違いない。できればジャコビー少年のような感じ方をしてもいいと思う。そして、ねむの木の下で眠る1万余の英霊達の魂の叫びを掬い取って欲しい。今、戦争を知らない日本人が80%以上になる。テレビで大学教授が話していた「1945年8月15日は何の日？」と質問しても殆ど答えられないという。こんな時こそ改めてユネスコ憲章の前文「戦争は人の心の

中で生まれるものであるから、人の心に平和の砦を築かなければならぬ「に思いが至る。硫黄島や他の戦地を訪れることがこの「平和の砦」を築く一助となる。

「人の心の平和の砦」とは何であろう。歴史を知り現場の悲惨な状況を確認し、残された家族の悲しい気持ちや思い、戦争を激しく憎むことも知れない。ある遺族の投稿文「戦場になった場所は生還者の案内がなければ訪れる人もなく、朽ちて分からなくなっていくます。

主人と息子二人でサイパンに行ってきた。風化し朽ちていく前にファイナシスと地獄谷だけでも見せたいと思ったからです。祖父達がこの地で戦い亡くなった現場を見せたかったです。息子達は何も言いませんでしたが、何かを感じ取ってくれたと信じております」。

栗林中将の孫で自民党の新藤議員も「硫黄島をたくさんの人が訪れる平和を祈る島にしたい」と述べられている。ジャコビー少年の体験からもうすぐ40年、またウクライナ戦争、ガザ戦争の悲惨な姿がある。こういう時こそ尚更硫黄島を多くの人が訪れ、人の心に「平和の砦」を築いて

もらいたいと強く思う。そこで大切なのは「自分の身に置き換えて」考えることなのだと思う。

平成6年、慰霊で

皇后陛下（現上皇后陛下）の御歌

銀ネムの 木々茂りゐる この島に
五十年眠る み魂かなしき

ねむの木は繁殖力が強く、遺骨収集の阻害事項の一つではあるが、心安らぐ緑の島も形成している。ねむの木の花言葉は「夢想」「胸のときめき」「安らぎ」。「夢想」はねむの木の夜に眠る性質から思い浮かべられたと言われている。ねむの漢字「合歡こうかん」は中国語で喜びを共にすること、夫婦が共に眠る様子を表わす。葉柄の左右の葉が閉じて合わさる様子がびったりと寄り添って眠るような姿であり和合のシンボルとも言われている。

硫黄島は未だ1万人余が故郷に帰ることなく眠る悲しき島ではあるが、せめて故郷へのご帰還が成るまでは、英霊が緑豊かな合歡の木に包まれた「安らぎの島」で眠っていることを…心の安らぎに…。